

「アーツ・チャレンジ 2019」選考委員講評

○五十嵐太郎(あいちトリエンナーレ 2013 芸術監督・東北大学大学院工学研究科教授)

もうひとつの展覧会

今回も二日の審査は大変だったが、最後のアーティストと場所のマッチングで思いの外、長い時間をとられることになった。理由は二つ。ひとつは選べる作家が最大 8 組であること。したがって、断腸の思いで落とさざるをえないアーティストがいっぱい出てくる。実は昨年 8 組だったが、このときは低層部の限られたエリアだけが展示の候補地だった。したがって、まだ考えやすかった。今回は 10 階、11 階、12 階、屋上も復活し、作家数は同じまま選択肢が増えたことで、場所のバランスを解くのがきわめて難しくなったのが、もうひとつの理由である。最終的に決定した展示プランは以下の通り。

地下二階から愛知芸文センターに入ると、進藤篤による踊るルンバおぼけが出迎える。右に曲がって、エレベーター付近壁は、加藤真史の描いた葉っぱが覆う。さらに進んで、通路展示ケースでは、小林美波の二次元キャラと同化するマスク群が並ぶ。外に出て、階段を登ると、踊り場において太い円柱と呼応する Yuma Yoshimura の三日月状の空間インスタレーションが展開する。今度は戻って地下 1 階フォーラムの北側壁面周辺では、加藤立による後ろ向きに歩く映像が日常風景を異化させる。今回初めて使われる 10 階の屋外庭園では、ナノメートルアーキテクチャーの鈴を集積した鐘が設置される。また 12 階の 2 つの展示室では、それぞれ三瓶玲奈の向こう側を想像させる絵と、大東忍の絵画と立体が混在する空間と出会う。

これらの作品は展覧会が実現した後、また講評を書くことになるので、残りは惜しくも落ちた作品に幾つか触れながら、もうひとつのありえたかもしれない展覧会の風景を記述しよう。地下入口のポスターケースは、前橋瞳による大きな目の女性がこちらを向く違和感のある絵。吹き抜けでは、須藤信が AR で確認できる巨大な金魚を泳がせる。地下階段には、井上修志による倒立した四角錐がぴたっと入る。地下 1 階の北側壁面では、阪中隆文が芸文センターの模型があることに注目し、それを生かした作品を提案した。10 階のホールでは、村田仁が黒板を設置し、毎日、言葉のアートとして詩をつむぎだす。アトスペースでは、末松由華利の空間を体験する大きな絵画や、冬木遼太郎のきまぐれロスコのインスタレーションも興味深い。そして葉栗里の大きな木彫、小川愛のでかいパンなどは、審査中、候補地をさまよいながら、結局、今回は居場所を確保できなかった。いずれも惜しかった。是非、再チャレンジしてください。

○木村絵理子（横浜美術館主任学芸員）

アーツ・チャレンジ 2019 審査講評

一昨年以来の参加となった今回のアーツ・チャレンジでは、前回以上に提出されたプランに対して、審査員からの意見や注文が多く出されたことが印象的であった。もっとも、それはプランに不備があったというより、むしろキュレーターの立場から、作品に対する意見や、展示プランに対するカウンター・プロポーザルを示したくなるようなプランが多かったということの証明でもあると思う。例えば、審査員内では高評価であった加藤立氏のプランに対しては、愛知芸術文化センターの中だけで完結するのではなく、名古屋の街中など、より公共性の高い場所で作品が展開し、行為の面白さだけでなく場と行為の関係がより有機的な広がりを持つことを期待したい。あるいは、進藤篤氏のプランについては、作品を動作させる機器の動きが既視感を抱かせるものにならないよう、また、長期間の展示に耐える動きが実現できるような障害物やフレームを設けるといった動作テストをしっかりと行って、且つ事前に入念な準備があったことなど微塵も感じさせないよう、軽やかさのある作品を実現してもらいたい。それぞれの作品が、内容面や完成度、安定感の点などにおいて、これまでとは違うステージへと一歩上がることができるよう機会となることを期待したい。

こうした期待は、提出されたプランの多くが、これまで制作してきた作品を想定範囲内で拡大させた内容であるケースが多く、過去の作品資料を見れば完成した展示について想像ができるように感じられたことへの物足りなさの裏返しでもある。本プログラムは、その名の通りにチャレンジの場であるので、ぜひ今後応募を検討している人、あるいは今回選ばれた人も、過去の成功体験だけに頼ることなく、新たな作品を生み出すための挑戦を続けて欲しいと思う。また、アーツ・チャレンジは展示に際して選考委員のうち1名のキュレーターが助言をするという点に特徴があるプログラムだ。参加者の多くはキュレーターとの協働による展示の経験がまだまだ浅いことと想像するが、今年度は特に、愛知芸術文化センターであいちトリエンナーレをはじめ様々な展示を実現されてきた拝戸氏がキュレーターに立っているのも、ぜひ施設のことをよく知るキュレーターだけが持っている展示のノウハウや、作品の見せ方・見え方について意見を求めつつ、作品を拡張させる好機と捉えて展示に取り組んでももらいたい。

○角奈緒子（広島市現代美術館学芸員）

難しかった審査を終えて

今年もやってきました、アーツ・チャレンジ審査の時期。審査員の役目を仰せつかるのも今年で三度目となり、展示候補場所もおおよそ頭に入り、大体の応募プランは各スペースを思い浮かべながら落とし込むこともできるくらいになってきたと思う。

昨年に引き続き今年も、舞台となる愛知芸術文化センターは一部で改修工事中だが、今回のアーツ・チャレンジでは 12 階のアートスペース G と H が復活し、その代わりというわけではないが、地下 2 階のアートスペース X は使用できない。アートスペース X は空間の真ん中に 2 本の柱が立つクセのある空間だが、G と H もそれぞれ大きな窓を備えた特徴的な展示室で、それを積極的に展示に取り込み活用するのか、それとも完全に無視してホワイトキューブとみなすのか、アイデア力が試されるスペースであることに変わりはない。

さて、今年の実応募プランについていえば、どれも甲乙付けがたく、逆にいえば、「コレはぜひとも見てみたい!」と思わせるプランが少なかった。厳しいように聞こえるかもしれないが、事実、満場一致で決まった作品は残念ながらなかった。さまざまなクセをもつ各スペースの特徴を活かした展示プランが出てくると唸られるものだが、「確かにここでなければこの作品は成立しない」と思わせるくらい説得力をもった作品が、今回は少なかったように感じられた。4 名の審査員の票も分散したため、各作品の実応募プランを繰り返し読み込み、審査員同士で意見を述べ合いつつ、応募者の意図を推測しながら作品の性質を捉えようと努める、という、根気が求められる検討、審査が続いた。

今回は落選したものの、強く印象に残った作品を 2 点、ここで紹介しておきたい。ひとつは井上修志による、巨大な三角錐のような構造体を逆さにし、頂点だけの接地で自立させるというプラン。当然、安全性が求められることになるが、プラン実現のためのより具体的な技術案が見えなかったのが残念だった。もうひとつは、小川愛による、バターとハチミツがしたたる焼きたて(風)の大型トーストを平面と立体で再現する作品。唐突としか思えないモチーフの再現性はいかほどのものか、が気になった。二人ともまだ若い作家なので、今後の活躍に期待したいところである。

なお、最終的に選ばれたのは 8 人(組)。彼らについての言及は、展覧会後の講評にまわすこととしたい。後悔のないよう実力を出し切れることを祈りつつ、実際の展示を楽しみにしている。

○ 拝戸雅彦（愛知県美術館企画業務課長）

私の立場で言えば、これまでは選考委員の一人だったが、今回は全体を取りまとめるキュレーターを任されることになった。開催時期となる来年の2月においても、この芸術文化センターの改修工事はまだ続いている。若手のダイナミックな個展的な展示には意外に迫力が出る、地下2階のアートスペースXが使えない他、10階の美術館がまだ休館中、ということもあり、これらのことを意識した選考になった。ただ、前回と違い、美術館を除けば、センター内で比較的ホワイトキューブにも近い、ように見えるアートスペースGとアートスペースHが復活している。それでも、選考される作家は前回と同様に、例年より少ない8組となっている。改修中のイレギュラーな状況でイベント全体にどのように魅力とヴォリュームが作れるのか課題は多い、と感じる。ただ、現代美術の公募企画としては知られるようになっていて、応募数はいつも通りだった。2008年の初回から、近くで見て関わっていた立場からすると、近年の傾向だと思うが、応募するアーティスト自身の空間の読み込み方が上手くなっている。例年通りに、開催が2月と寒い時期なので、一般の方は地下2階の通路を経由しての入館を想定した。地下2階のフォーラムIIがまず鑑賞者の出発点となる。そのフォーラムIIでは、数体のゴースト（お化け）が自動的に動きまわる進藤の作品が、見るともなく普通に通り過ぎる入場者にとってもユニークな風景となり、同時に気配らしきものを体験することを期待しよう。続けて、エレベーターホールに向かうと、そこには、加藤真史のオールオーバーな雑草の風景が横に広がるはず。この建物の白い大理石が目立つ、乾いた風景にも見える場所に、空き地のような場所が誕生するのを思い浮かべたい。そこを抜けて、展示ボックスの中には、小林による自分の顔を型どった石膏像が並ぶ。そこにはそれぞれ別の顔が塗られている。問いかけるのはアイデンティティの喪失なのか、それとも自由にキャラクター化された自分の姿なのか。外に出て、階段を上がっていくと、吉村の、鑑賞者を映し出す鏡を出発点に、反射する光と自らの姿が交錯する風景が展開される。そして10階の閉館中の美術館の前から庭にかけてはナノメートルアーキテクチャーが鈴による鐘を作る。風が音を作り出すが、冬の時期に鳴る鈴の音の響きに耳を傾けたい。12階では三瓶が絵画の構造体のモデルを提示する。続けて、大東が皮膚としての絵画を提示。これまで、アートスペースG、アートスペースHは、視覚的な見応えを提示してきたが、今回は頭脳的な部分を刺激することになりそうである。二人とも窓があるスペースであることを十分に意識した。加藤立の場所はB1のフォーラム北側となり、芸術文化センター内を行き会う人の姿をユーモラスな形で映像化して、それを提示する予定となっている。